

職人の技

シリーズ③⑥ 〈精密機械部品加工〉

菅野 克博 さん

「昔は、こうやって話していても、周りからプレス工場が音が聞こえてにぎやかだったんですけどね」

少しだけ寂しい表情が浮かぶ。しかし、決して暗くはない。むしろ目には小さな炎が浮かぶ。

「でも、ここじゃなければできないことがある」

町工場のメッカ。いつしか東京都大田区はそう呼ばれるようになった。高度経済成長の昔から、工場が集積するエリアだったが、むしろ注目されたのは、皮肉にも製造業の冷え込み、落ち込みが報道されるようになってからではないだろうか。製造業の海外移転、モノづくりの空洞化。その中にある大田区の町工場は、日本が誇ってきたモノづくりの最後のとり

で、アイコンといわれ始めた。

「コストのことを考えたら、海外移転は仕方のないことだと思います。機械化されて誰がやってもいい仕事もあります。だからこそ、この場所できかないことがあるということ、分かってもらえるんじゃないでしょうか」

単純な加工は、機械の独壇場。人件費などのコストとの戦い。しかし、精密機械の加工は、非常に高い精度が求められる。それは熟練の技術者の独壇場。マイクロ以下の精密な「寸法を出す」仕事は、デジタルではなく職人の世界。

「素材を削っている時の音で

難しいことは、
楽しいこと。

分かるんです。その音次第で穴を開ける機械の回転や、素材の送りの（押し込んでいく）力加減を変える。こればかりは、熟練しなければできない」

もともとモノづくりが好き

だった菅野さん。就職は機械を扱う会社のサラリーマン。しかし、会社員である自分に違和感を持つていた。そして独立。

1年目は驚くほど順調。好景気という時代背景もあり、受注も次々と入ってくる。何をやっても「食える時代」だった。しかし、2年目、オイルショックが襲う。冷え込む景気。周りの工場の音がなくなる。そこから立ち上がったのは、や

はり、自分の技術だった。

「難しい仕事を任されるのが楽しいんです」

菅野さんが手掛けるのは、チタンやジルコニウムをはじめとする超合金といわれる分野の加工。薬品、耐熱用のバルブなどにも使われる、高い精度が必要なもの。ほんのわずかなすき間に強い薬品がたまることで重大な事故につながるなど、非常にデリケートなものだ。

しかも最先端の商品を扱うだけに、素材も設計も最先端。年齢を重ねるごとに、技術は新しいものになり、それを自分のものとしなければいけない。

「でもそれこそが、モノづくりの面白さ。もちろん最初は自信ないですよ。1kg当たり8000円もする高価な素材。見たこともないものを、まずは経験と度胸でやっていく。

難しいけれどそれが面白い。この年齢になると、逆にそれしか楽しみはないですよ」

と笑顔で語る菅野さん。誰がやってもいいものなら、何も自分がやらなくてもいい。自信、いや、モノ作りが好きだった少年の、あのころの純粋な気持ちは今も生きているのかもしれない。

菅野さんより年上、70歳を超えてなおエネルギーに頑張っている先輩がいる。好奇心をまったく隠さない様子で「菅野さん、新素材なんだけど、ファックス送るからあんなの意



文=岩瀬 大二
text: Daiji Iwase

写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto



見聞かせてよ！」。そんな仲間が大田区にたくさんいる。

30歳で脱サラをしてこの地に小さいながらも自分の城を構えた。周囲は住宅街に変わって、住む人も変わった。だが、がむしゃらだった昭和48年、忙しくて、ふらふらになって、硬

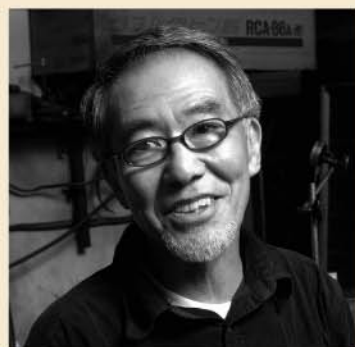
い素材を落としてできた傷がある。工作機械の足元に焼け焦げが残っている。風景は変わったけれど、38年にわたって、モノづくりに懸けてきた時代と自分の人生がここにある。

「もう、早く引退したい(笑)。でも、お世話になった

大田区で、新しい人を育てたい」

門を叩く若手技術者にかけての期待。もちろん1、2年でどうにかなるものでもない。それでも後輩たちにできること。

「1からではなく10から教えちゃいますよ。後から1から9は覚えてくれればいい(笑)」



PROFILE

かんの・かつひろ

父親の仕事の関係で満州に生まれる。機械系の会社に勤めるが独立。昭和48年、自身で菅野製作所を創業。以後、精密部品加工を主軸に大田区の同所を拠点に活動。平成22年度「大田区ものづくり優秀技能者(大田の工匠100人)」にて第3回工匠として受賞される。加工困難な新規素材などを受注し、その高技術力を発揮しながら、現在は後進の指導にも力を入れている。